
霞む背中（婚約者がアレだった件）

はまな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霞む背中（婚約者がアレだった件）

【Nコード】

N0114Y

【作者名】

はまな

【あらすじ】

婚約者は、大作家で、俺は彼女と婚約した後でそれを知った。彼女は、あの恐ろしい、地獄のような世界 「作家達の世界」に住んでいたのだ。俺が耐え切れず、挫折したあの世界に。だから俺は彼女がどんな場所にいたのか、何を見ていたのか、知らない。それを知るより先に、彼女は事故でこの世を去った。

ネットの小説投稿サイトに作品を上げて満足していた俺は、彼女に完膚なきまでに置き去りにされた。だが、それでも、俺は知りた。彼女が、どこに向かって走っていたのかを。

前半

書け、書け、書け……

幻聴であると分かりきっているそのささやき声が誰のものなのか、それはもう分からなかった。俺は机に突っ伏して、吐き気と頭痛が渦巻く中で、じつと自分の部屋の壁を見つめ続けていた。

パソコンが低い唸り声を上げ続けている。古い機械のにおいがした。画面はつけっぱなしで、使い慣れた、見飽きた、ワードのウィンドウが開いている。打ち込まれた中途半端なテキストの群が責め立てて来る様だった。書け、書け、書け。這い蹲らず、項垂れず、嘆息せずに。書け。

最後に横になって寝たのがいつか分からなかった。書いて、頭を抱えて悩み、消して、また書く。その繰り返しの中に、気絶に近い睡眠が何度も挟まれた。

胃が空っぽで、刺すように痛んだ。喉が乾ききって舌が張り付く。もう、何週間そんな生活をしているのか分からなかった。

ふと、携帯電話が眼に入った。何通ものメールが届いている。バイト場の同僚、中学時代からの友人、両親、兄弟。だれもが俺のことを心配していた。手にとってそのメールの群を掻き分けていると、その携帯のプラスチック・ボディが震えた。

着信。画面には妹の名前が表示されていた。

「もしもし……」

「兄さん！ もう、何度電話したと思ってるの！ 葬儀からこつち、電話も繋がらなくて どれだけ皆心配してると思ってるの！」

「うん……ごめんな」

答えたその声は、ひどいものだった。掠れて、さび付いた、自分の声だとは到底思えないような干からびた声だった。

「兄さん……？ ちょっと、どうしたの？ ねえ、ずっと、どうしてるの、バイトにも行ってないみたいだし 担当の人も、心配してたよ？」

「ああ、そのな、小説を、書いてるんだ。ずっと」

「ずっとって、葬儀から？」

「うん」

数秒、間が開いた。妹の疑問符を浮かべている時の顔が思い浮かぶ。

「……そりゃ、兄さん、一応作家だし、当たり前だけど……。でも、ねえ、どうして連絡がつかなかったの？ 小説書いてただけなんでしょう？」

「そうだよ。でも、だから、他のことが何も出来ないんだ」

「わけわかんないよ、ねえ、どうしちゃったの？」

「あのな」

やや強めに、俺は言葉を搾り出した。多分伝わらないことを意識しつつも。

「『小説』、書いてるんだよ、美紀」

「……あのさ、良く分からないけど、お母さんとか、仕事関係の人とか、ちゃんと連絡ぐらいしといてよ、皆心配して」

「ごめん。今な、忙しいから」

そう締めくくって一方的に切る。しばらくそのまま手に持った携帯を見つめてから、俺はおもむろにそれを台所にもって行き、排水溝に投げ込んだ。上からざばざばと水を流す。

水を止めると、俺はまたパソコンの前に戻った。

「続き、考えないとな」

書け、書け、書け。

怨嗟のように、呪詛のように。どこまでも追いかけてくる。背中を炙ってくる。

俺は、どこまで走ったら良い。どこまで、どれほど早く走ったら、お前を本当に失わずにすむんだ。

蘭花。

*

蘭花と出会ったのは俺と彼女のバイト先であつた本屋で、求婚・婚約したのはその本屋が入っているビルの最上階にある展望ラウンジだつた。

俺はバイト場で最も大人しい人間だつた。というか、そもそも周りが大学生だらけのアルバイト先で、たつた一人二十七にもなる良い歳した大人であるところの俺は、落ち着いているのが当たり前で、そうしているより他になかつた。

落ち着いて、静かにしているのは苦ではなかつた。本に囲まれた仕事は心地が良かつた。

その頃の俺は、充実していた。

二十歳の時にとあるライトノベルレーベル新人賞で金賞をとつたものの、三年経つてほとんど無名の元・作家に成り果てていた俺は、散発的に、雑誌のちよつとした空きページに短い連載を載せてもらつたり、急遽休載になつた作家の穴埋めとして短編を載せたりしていた。

勿論それだけで生活できるはずもなく、バイトを始めた。本屋のバイト。一応作家であるということと話したところ、店長は快く俺を受け入れてくれた。

新人賞の栄光から、次の栄光を掴むことができずアルバイト人生に転げ落ちたことを、しかし俺はさほど悪いことだとも思っていない。作家というのは、生半な仕事ではない。賞をとつた作品はそれはもう苦労して書き上げた物だつたし自分なりに最大限努力したその結晶だつたのだが、いざプロの世界に入ってみれば、まともに作家として活動し続けている人間というのは、その『自分なりの最高傑作』をつぎつぎに書き上げ、しかもそのたびに質がどんどんと向上していくような化け物ばかりだつたのだ。

書いて、書いて、書いて。

年に何冊も本を出して、作家専業で生きているような人間が、どれほど壮絶な人生を送っているのか。しかも、その壮絶さを本人たちは当たり前だと冷ややかな顔で受け流しているのだ。本当の壮絶さはもつと違つところにある、というように。

「どう、また長編出す?」

そう訊かれて、ようやく二冊目の本を出したばかりであつた俺は、ゆっくりと首を横に振つた。今頑張らないと、上手く続かないかな、名前忘れられちゃうよ、と担当は優しく諭すように言つてくれたが、俺は俯いてすみませんでしたと謝るばかりだつた。

見誤つた。

それが全てだつた。軽い場所じゃない。有名になつて金が入つてファンレターが届いて。それらはすべて飛び上がるほど嬉しかったが、その全てを打ち碎いて風化させるほどに、その世界は辛かつた。書いて書いて書く。恐ろしい生みの苦しみを味わい、何とか一つ仕上げて、落ち着く間もなく次の作品に取り掛かる。また苦しみがやってくる。

そうして出した本は、なんとも簡単に商業ラインに乗つていき、さばかれる。アレはヒット、アレは微妙、アレは駄作。

それらにめげず、脅かされず、次を書く作家達が真剣に恐ろしかった。お前らどうしてそんな怖い場所にいられるんだよ、汗一つかかずに、悲鳴一つ上げずに、なんで次の作品に取り掛かれるんだ。

そういうわけで俺は不真面目な「ちよい書き作家」になつた。この立場に踏みとどまれたのは、俺のようなばんくらを気に入つてくれた最初の担当やその周囲の人間が俺を保護していてくれたからだ。俺はアルバイトの合間に物を書く。本当に時々。

そして、仕事ではなく趣味として、ネットの投稿サイトにお話を書いてアップする。こっちは甘い世界だ。シビアな批評も経済的批判も飛んでは来ない。アマチュア作家同士適当にだらだらと褒めあつて、評価しあう。

ただの馴れ合いじゃない。だけど、本気で、何もかもをかけて一作一作より良い作品を書いて、息継ぎも半端なままに次に取り掛かるような恐ろしい世界でもない。

俺はその生温さが好きだった。ゆったりした人間には、ゆったりした作家活動の場があつて良い。更新が一日遅れたつていい。駄作に仕上がつてしまつても良い。誰かは褒めてくれるし、また次を書けば良い。自分より下手な奴は吐いて捨てるほどいるし、焦ることはない。俺にだつて価値がある、俺の作品にだつて。そういう、暖かい場所だ。

俺は充実していた。バイト、なんちゃつて作家活動、ネットでの執筆活動。このみつつで、俺の生活は完成していた。安定した、優しく満ち足りた世界。それがそこにあつた。

*

バイトを始めて二年目の年に蘭花は現れた。

新しいバイトとして彼女は春から採用され、働き始めた。俺が二十四の時で、彼女は二つ下の二十二だった。

自己紹介の後、彼女は基本的な仕事を一通り覚えるために、俺について回つて色々教えてもらえと店長から言い渡された。一日彼女にレジ業務や品出しやシユリンクや返本などの仕事を教えて回つた後、俺は彼女と一緒に帰りの電車に乗るために駅に向かつた。

その道の途中で、彼女はふと思いついたようにこちらを見上げて言った。

「そういえば、杉本さんつて作家さんなんですよね」

俺はあわてて彼女に、自分が半端物の、ほとんど業界から忘れ去られた作家モドキだということを説明した。

彼女は俺の説明を聞くと、難しい顔をした。眉を寄せて、何で本出すのやめちゃつたんですか、と訊いてきた。

俺は困りきつて、近くの喫茶店に彼女を連れて入つた。

「怖くなつたんだ」

細かく色々説明した後、俺は最後にそう付け加えた。口に出してみると、それが一番しっくりきた。俺はあの世界が怖かった。

ただのバイトの後輩である女の子に、こんな話分らないだろう。俺は一通り話した後、そう思った。そのはずが、彼女は丸い眼を大きく開いて、感心したような顔になっていた。いつの間にか。

「そっか……それはそうですね、怖い、ですよね」

一人で頷き、深い理解の色を彼女は示した。俺は不思議だった。不思議だったが、嬉しくもあった。自分が作家をドロップアウトしたこと、ドロップアウトして穏やかな生活を選んだことを、その価値を理解してくれたような気がしたからだ。

それから俺は、少しずつ彼女、蘭花と色々な話をした。次第に俺と彼女は仲が良くなり、仕事の帰りに一緒に食事をする仲になった。更に時がたつと、仕事場により近い俺の家に彼女は時々泊まるようになった。

俺の生活は充実しきっていた。毎日が満ち足りた気分だけで出来ているようだった。

蘭花と出会ってから三年以上たった頃、店長が俺に社員にならないかと言ってきた。詳しく聞いてみると、かなり良い条件で、俺を雇ってくれる話があるということが分かった。何年もバイトをしていて、俺はその頃一部の社員よりもエリアマネージャーよりも店をよく知り、売り上げを伸ばす方法を知っていたから、それはもしかしたら妥当な打診だったのかもしれない。

俺は浮かれた。

蘭花との付き合いの中で、少しばかり不安だったのは、俺がフリーターでしかないという金銭・社会地位的事情のことだった。彼女は俺を好いていてくれていたが、浮き草のような不安定な生活をする男が女性を巻き込むことにはさすがに抵抗があったのだ。

分かりやすく言い換えれば、プロポーズするのにアルバイターで

は格好がつかなかったのだ。

「わぁあ……」

漫画みたいに口を開けて、蘭花は差し出した指輪を見つめた。五十八面体のダイヤが展望ラウンジの落ち着いた照明の光を受け取ってはちきれんばかりの輝きを放っていた。

分かり易すぎるほどに分かり易い求婚。指輪はずっと溜めていた原稿料で買った高級品だった。

「凄い、ねえ、これ、本当に？」

「嘘だったら洒落にならない規模の嘘だな。本当だよ、これで嫌です、って答えられたら俺はこれから周りの飲み屋を渡り歩いて朝まで泣くことになる」

ひとしきり笑った後で、彼女はそっと指輪を受け取った。

「ありがとう、義時さん、わたし、今ちよつとびっくりするくらい嬉しい」

元作家としては遺憾なことに、その時俺は彼女の浮かべた笑みに関して、非常にありきたりな表現しか思いつかなかった。つまり、目の前のダイヤが霞んでしまうほどに美しいものだ、というような。

後半

俺の人生は完璧で充実していて幸福で絶頂だった。この上なく良い気分だった。

ネット小説も好評だった。萌え関係が人気らしいとあって適当に若者向けの可愛い女の子一杯のお話を書いてそれがサイトのランキングに上がる。交流のある作者達が褒めそやしてくれる。おもしろい、キャラが可愛い、話が上手い。

何せこちらら新人賞受賞経験ありの元作家だ。ちょっと適当に書いてアップすれば、上手い面白いと感想がつく。楽しくて仕方なかった。

俺は小説を失っていない。失わずに、他の多くのものを手に入れた。

良い気分になりながらバイトに出かけて、仕事をこなす。そうしているところある日、それまでバイトを休んだことのない蘭花が就業時間になっても現れないことに気がついた。店長に問うてみると、彼はこともなげにこう答えた。

「ああ、彼女ね、なんだか急に出版社の方に呼ばれちゃったみたいで」

「出版社？ どういうことですか？」

「だから、ほら、彼女本出してらでしよ、一杯。その関係で、呼ばれちゃったんじゃないかなあ」

急に呼び出したなんて、困るだろうにねえあの子も。

そう穏やかな口調で話す店長を前にして、俺は固まっていた。本を一杯出している？

翌日、僕は彼女を食事に誘い、問い質した。

じっと彼女は黙っていたが、しばらく無言で待つと、静かに話し始めた。自分が作家であること。バイトを始めた頃から既にそうだ

ったこと。

俺はそのときすでにいいかげん驚いていたが、彼女の口から彼女のペンネームを聞いて飛び上がりそうになった。ここ何年かで急激に名が売れた、大ヒット作家の名前だったからだ。テレビや雑誌、あちこちで特集が組まれ、作品のいくつかはドラマや映画やアニメにまでなった。

驚愕して、椅子の背にしがみつきそんな俺を、彼女は申し訳なさそうにして見つめていた。

「ごめんなさい……もっと早くに言おうと思ってたんだけど、中々言えなかったの」

「なんで」

「義時さん、ほら、最初あった日に、話してくれたじゃない。『怖くなった』、って」

何故かは知らないが。

俺はこのとき、激しくなにかがとても「悪い」と感じたのだった。

*

誰も悪いわけじゃない。彼女だって俺だって何も悪いことはしていない。彼女が大作家で何が悪い？ 婚約者がそれだけ凄い人間だなんて、むしろ良いことのはずだ。

俺が作家をドロップアウトしかかった人間で、何が悪い？ ちゃんとした社員にもなれそうだし、親の脛をかじっている餓鬼じゃないんだ、立派な社会人になれるんだ、何が悪い？

ネット小説の執筆で快感を得て、何が悪い？ 小説はトップレベルの作家の為だけにあるわけじゃないだろう、甘ったるい世界で互いに作品を見せ合って楽しんで何が悪い。

誰も、悪いと言って責め立てる人間なんかいない。

ただ、そのはずなのに、俺は、誰かに責められている気がした。

あの恐ろしい世界 小説家の世界に住む住人達に、言われてい

る気がした。

「逃げ出した」「投げ出した」「お前はこっちは来られない」「俺たちがどうしてここに留まっているのか、お前には一生分らない……」

体を、内側から焦がされているようだった。俺は、作家を続けられなかった。俺は、俺は……

そして、気がつく。

俺は、何がこんなに苦しいのか。不安なのか。

それはつまり、蘭花が、俺の理解できない世界に立っていることから来る不安であり、苦しさであるのだ。彼女は、あの世界に立ち続けている。

辛く厳しい戦いの後に、更に辛く厳しい戦いが待っている、その繰り返しの世界。無限に続く地獄の世界。

どうしておまえは、そんなとこにいられるんだ。

より良い作品を、より凄い作品を。それができたら更に良い作品を。少しでも書けなくなれば、筆が止まってしまえば、のた打ち回るほどの苦しみを味わってしまう世界。

どうして。

かつて俺は、周りの作家を見てその疑問を抱いた。同じ疑問を、今度は蘭花に向けている。どうして、そこにいる。

そしてそれは、絶対に答えの出ない疑問だ。

その場所に立った人間にしか、分からない疑問なのだ。だから俺は、蘭花もまた、わからない。俺は、蘭花を失いかけているのだ……。

俺のわからない世界。俺の知ることが出来ない、覚悟の世界。蘭花がそこに生きる種類の人間だと分かってしまったら、もう俺は蘭花と一緒にいられないのではないか。置いていかれるのではないか。そう考えると、寒気ばかりが襲ってきた。自分が取るに足らない、なにかすべきことを怠った屑である気がした。ネット小説で適当に楽しんでいる自分が、たまらなく嫌になった。蘭花はこんなところ

にはいないのだから……。どこかで誰かが、囁いているようだった。書け、書け、書け……と。

*

俺は蘭花と婚約し、彼女が大家作家であると知り、幻聴が聞こえるようになった。これからどうしようかと考えながら過ごしていると、あっさりそれはやってきた。

蘭花が事故に遭って、いとも簡単に、この世を去ってしまったのだ。

俺は病院でも事故現場でも葬式でも、泣かなかった。悲しいとさえ、感じなかった。

ただ、ただ

失われた

それだけを感じ続けていた。

俺の知らない世界。俺の知らない苦悩。俺の知らない喜び。俺の知らない幸せ。俺の知らない努力。俺の知らない景色。

蘭花は、それら全てを抱え、俺にそれを教えることも、俺がそれを知りに行くこともないままに、死んでしまった。

作家達がせせら笑っている気がした。ネットで調子付いてる元作家には分からない高みで、「最初からお前なんて来なければよかった」と言っている気がした。

ぼうつとしたまま、俺は淡々と葬儀に出た。事故現場に足を運んだ。彼女の死に顔を見た。

彼女の死体はひどいもので、手足が千切れかかっていた。巨大なトラックに挟まれて引きずられて、顔の皮さえズレていた。

俺の婚約者がアレなのか。

物質的な意味でも、精神的な意味でも、蘭花は完璧に、俺を置き去りにした。大作家として。崩れた死体として。

俺は何日も寝込んで、起き上がった後にパソコンをつけてネットに接続した。愛用している巨大なネット小説投稿サイトにアクセスし、自分のページを開いた。

多くの評価、多くの感想、広いコミュニティの輪。暖かい場所、甘いにおいのたちこめる場所。厳しく恐ろしい戦いのない場所。

俺はその中で人気者になる方法を知っていた。他人の作品を沢山褒めて、色々な人のニーズを考えた作品を書いて、ポイントを稼いでいくのだ。それだけで、たちまち人気者になれる。みんな暖かく迎えてくれるし、認めてくれる。

悪夢だ

あの恐ろしい世界、作家の世界にすることも。そこから抜け出して、このネットの中にもいることも。どちらも、ひどい悪夢だ。

幻聴が囁く。書け。書け。

俺はネット小説の続きを書こうとして、すぐにやめた。データを全て消して、ネット上からも作品を削除した。

蘭花。お前は一体どこにいたんだ。

全力で走らなければ。全力で書かなければ。人生を、命を賭して書かなければ。

彼女の小さな小さな、はるか前方に霞む背中すら、見えない。

俺は既に彼女を失った。その上、彼女がどこにいたかまで、見失いたくない。その一心で俺は新しい作品を考え始めた。

ひたすら考えひたすら書き、気絶して泥のように眠り、痛みに耐えて踏み出し続ける。

書け、書け、書け……

覚悟を見るために。同じ場所を見るために。知るために。
彼女の人生を。小説を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0114y/>

霞む背中 （婚約者がアレだった件）

2011年10月29日05時23分発行